
イヴはあなたと...

御堂志生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イヴはあなたと…

【Nコード】

N6893P

【作者名】

御堂志生

【あらすじ】

「月は何でも知っている」シリーズ5作目/テーマ「クリスマス」/最初で最後の恋人同士で過ごすクリスマス。美希の期待は大き過ぎて…

「ざっけんじゃねえーつつの!」
「み、美希つてば、声大きいよ」

一緒に飲んでた圭子ちゃんが、必死そうな声で私を宥めてたのは
覚えている。

でも……来春結婚を控えた婚約者フィアンセから、クリスマスパーティーに行
こうって言われたら、普通は期待するでしょ?

「なんでっ、クリスマスまで、じいちゃんばあちゃんと一緒に過ご
さなきゃなんないんですかっ? って言ってるの。私はっ」
「判った。判ったからさ。立派な人じゃない、ね」

確かに立派かも知れない。一人ぼっちで過ごすデイケアのお年寄
りの為、イヴの夜に病院を開けてクリスマスパーティーなんて。送り
迎えまでして、しかも全部自腹だし……。

私の婚約者、神崎望かんさきのぞむはそういう人なのだ。

「ほらほら、ね、美希もそう思うでしょ? 金儲け主義のドクター
だったら、美希だつて結婚する気にならなかったんじゃない?」
「そ、それはっ」
「第一、プレゼントはそれなりに貰ったんだし……。金額としちゃ
大きいほうよ。うん」

言いながらも圭子ちゃんの頬はヒクヒクしてた。笑いを堪えてい
るのがアリアリだ。

そりゃそうだろう。クリスマスパーティーと言ってイヴの夜に誘わ

れ……。何のことはない、ミニスカサントでおじいちゃんたちに温かいお茶と和菓子を給仕して回ったのだ。

「先生のお嫁さんはいい人だねえ」
なんて言われたら、引くに引けない。

それに、実入りは少なくても経営者である彼に恥を掻かせてもなあ、とか思ってたわけよ。そんな健気な一回りも年下の婚約者に、あのプレゼントは最悪でしょ！

「それなり？」

思わず、こめかみがピクツとした。

圭子ちゃんも気付いたらしい。「えーと、えーと」……フォロイしようとして一瞬懸命に言葉を探している。

「どこの世界に、フィアンセへのクリスマスプレゼントに、商品券渡す馬鹿がいるのよっ！ お歳暮じゃないっつうの！」

私が最大にムカついている理由。

さらにさらにつ、あの超無神経男は、

「パーティの準備で時間が取れなくて……これで好きなもの買って来たらいいよ。あ、日曜は……夜中まであつちの仕事が入ってるんだ。年末年始は書き入れ時で。ごめんね、美希ちゃん」

そこのたまってくれた。

こつちだつてサービス業で、年末年始は大忙しなのよ。それを、パーティなんて言うから……。婚約者の実家の都合で、なんて必死で頭を下げた私が馬鹿だつて言うの？

拳げ句の果てに、おじいちゃんたちを送って行くから悪いんだけど……とか言つて婚約者を放置する？

それでも、十一時過ぎまで待つてたわよ。寒々しい病院の中、一人黙々とパーティの後片づけをしながら……。
でも、不意に虚しくなって。彼氏が海外出張中の圭子ちゃんを呼び出したのだ。

「もう、その辺で止めたほうが……」

そんな圭子ちゃんの声が、私の耳にずっと残っていた。

飲んだ翌朝、アルコールの量の割りに頭がガンガンしないのは、私の体質ってやつである。

なんか水音が聞こえて……ゆっくりと目を開けた。

良かった。今日は午後出勤にして貰って……。ボンヤリした頭でそんなことを考えてみる。でも、何かおかしい。

ジッと目を凝らすと、天井が実家の見慣れたものと違う。なぜか判らないけど、大きな鏡があるのだ。でもって、私がそこに映っている。……なんで？

その時、私の耳にザーザーとシャワーを流すような音が飛び込んできた。

どうやら、さっきの水音はコレらしい。部屋にシャワーなんてついてないのに……。ひょっとして、圭子ちゃんの家？ そう思いながら体を起こした瞬間、心臓が止まった！

なんと 全裸っ!？

上も下も靴下すら履いてない、見事なスツポンポンだ。

ちよつと待って、落ち着くのよ私。

かなりあやふやな記憶を辿っていくと、そう言えば、「クリスマスに女ふたり？ 良かったら一緒に飲もうよ」なんて、スーツ姿の男二人に声を掛けられた気がする。

部屋を見回すと、椅子の背もたれに紺色のスーツが無造作に掛けてあった。そう、ちょうどあんな色のスーツを……私はハツとして首をブンブン振る。

違うわ。違うって。よ、酔っ払って眠っただけよ……
だ、だって、私が彼のことを裏切ったりするはずないし……

そう思って神様に救いを求めた私の目に、衝撃の事実が飛び込んできた。

枕元に四角いパッケージが二個。それも、しっかり開封済みっ！

浮気の証拠を目にした途端、色んなことが頭に浮かんできた。

「ルン先生のばかあ〜〜。もつと、私だけ見てよあ〜〜」

なんて、彼の副業“占い師・ルン先生”の名前を呼びながら……
私は自分から抱きついた。

「ごめんね、美希ちゃん。大好きだよ」

そんな声が聞こえた気がして、私は彼を受け入れたんだ……。体

の奥が少しだけズキズキする。

実は婚約して何ヶ月も経つのに、エッチしたのは一度だけ。私にすれば初体験だったから……これで……二度目???

二度目のエッチが浮気なの？ しかも誰だか判らない人と、イヴの夜に浮気しちゃったの？

早く服を着て帰らなきゃ。

そう思うけど、体が震えてどこに脱いだ物があるのか判らない。

どうしよう……どうしよう……どうしよう……同じ言葉だけが頭の中でぐるぐる回っている。

カタン。

暖かい湿った空気が部屋に広がった。シャワールームのドアが開いたんだ、と判る。すると、当然のように昨夜、私を抱いた男が出て来たのだ。

慌ててベッドに飛び込み、頭から布団を被った。もう一回しよう、とか言われたらどうしよう。このことが彼にバレたら……。目の前が真っ暗になって、吐き気まで感じた。

「起きた？ だったら、もう一回しようか？ 美希ちゃん。それとも、もう時間ない？」

聞き覚えのある声に、私は思わず布団から顔を出した。すると、バスタオルを腰に巻き、ベッドに座ってるのは……ルン先生？

「なっ、なんで？ どうして先生が？ ひよ、ひよ、ひよっとして、昨夜、私を抱いたのって……」

「誰だと思っただけ？」

他の男だったら、ムツとした顔をするトコだろう。でも彼は、ニコニコしながら答えたのだった。

「私には婚約者がいるのっ！ 他の男なんて飲みたくない。クリスマス夜の夜に、恋人と過ごせるなんて……私には最初で最後のチャンスなんだからっ」

って感じで叫んでたらしい。

うん、付き合ってた彼氏はいたけど、一緒に聖夜を過ごす、なんて色っぽい関係じゃなかった。で、春には結婚しちゃうんだから、恋人とデートなんて私にとっては最後だと思う。……離婚したら別だけど。

「じゃあ、僕と一緒に過ったら過ごしてくれる？ って言ったら……僕の顔を見るなり号泣しちゃって」

う……。居酒屋さんも、圭子ちゃんもさぞかし迷惑だったろうな。

「遅くなって悪いんだけど、僕の帰りを待ってて、って言ったのにイライラしてて、そこまで聞いてなかった。

「ひょっとして……他の男とエッチしてる気分だった？」

「違う！ それは絶対に違うもの。先生だって……思ったから」

それだけは、と思ってソッコーで言い返した。

すると、まあ判ってるけど、とばかりの笑顔で彼は答えたのだ。

「だろうね。ルン先生つてずっと呼んでたから」
「それは……だって……」

焦って左手で髪をかき上げたその時、何かが髪に引っ掛かった。
ピツと引っ張られて、「痛っ」と小さな声を上げる。

でも、その引っ掛かったモノつて。

「ソレを渡してなかったから。そっちに気が取られて、クリスマスプレゼントが商品券になっちゃって……。後、結婚するのに貯金が減ったままじゃアレだろ？ 年末年始に頑張るから、君は心配しなくていいよ」

左手の薬指にきらきら光る指輪がはまっている。

さつきはパニクってて全然気付かなかった。こんな隠し玉があるんなら、なんで先に出さないのよっ！ そしたらきつと、一晩中でも待ってたのに。

「あの、さ……占い館の開業時間まで、二時間あるんだけど……する？」

落ち込んでた分だけ、このサプライズはかなり利いた。無神経だけど、ホント、ツボは心得てるっていうか……。

「して……あげてもいい」

私は二時間以上あるし、そんな言葉はキスでかき消されて……。

私たちは、最初で最後の恋人同士のクリスマスを過ごしたのだった。

f
i
n
{

}

(後書き)

御堂です。

ご覧いただきありがとうございます。

せっかくのクリスマスなのでSSを書いてみました。

時系列的には、

「君に出逢うために」「月は何でも知っている」「月のウサギ」

「好きって言えない」「イヴはあなたと…」
になります。

よかったら、ぜひご覧下さいませ(^^)ノ

(背景は<http://olive3.studio-web.net/>「クリスマス素材Best」様から使わせて頂きました。ありがとうございます)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6893p/>

イヴはあなたと...

2010年12月24日18時29分発行